

多変量解析 : 考察

| | |
|----------|---|
| 著者 | 大林 太良, Obayashi Taryo, オオバヤシ タリ ヨウ |
| 雑誌名 | 国立民族学博物館研究報告別冊 |
| 巻 | 011 |
| ページ | 231-234 |
| 発行年 | 1990-03-10 |
| その他のタイトル | Statistical Analyses : Discussion |
| URL | http://doi.org/10.15021/00003694 |

V. 考 察

大 林 太 良*

1. 文化の2分法

2. 亜中核モデル

1. 文化の2分法

343文化要素の有無にもとづき、東南アジア・オセアニアの237文化をクラスター分析した結果、かなり首肯しうる樹状図がえられた。この方法によって東南アジア巨大群とオセアニア巨大群という基本的な2分を確定し、さらに亜群の水準における8大クラスターを設定し、以下の水準においてより細密な分類をおこなうことができた。この第1の分類を、つぎに、同一データによる文化の因子分析、さらに文化要素を単位としたクラスター分析と、因子分析をおこなうことによって検証した。これら四つの方法のこのような相互検証の結果、若干のグルーピングと、若干の文化類型の規定について、その信頼度が高いと認めることができた。

もっとも著しい例をいくつか挙げてみよう。

第1に、東南アジアとオセアニアという初次的な2分がある。この2分は、文化の樹状図と要素の樹状図に、大変明瞭に現われるばかりでなく、文化の因子分析では、因子1,2がこの2分法にしたがっており、文化要素の因子分析においても因子1,2がこの分類である。

本研究において強調されたこの2分法が広範にわたることは、われわれの予想を越えるものであった。人類学者は、オセアニアと東南アジアの民族と文化における連続性を、常に強調している。たしかに、オセアニアへの居住は東南アジアからなされたものであるし、タロイモ、ヤムイモ、ココヤシなどの栽培植物、ブタやイヌのような家畜も、東南アジアからオセアニアにひろがったものである。最後に、オーストロネシア諸語も、東南アジアからオセアニアにかけてひろがっている。したがって、東南アジアとオセアニアの間の連続性の存在を疑う理由は何もない。

* 東京大学教養学部

それにかかわらず、われわれはこれら両地域の文化の間における重大な相違の存在を明らかにすることができた。これらの相違の一部は、あとになって東南アジアをおおったが、オセアニアには到達しなかったような影響や寄与によって説明できる。このような多くの影響のなかには、たとえば、穀物栽培、金属技術、仏教やイスラム教のような大宗教がある。

しかし、これら外来の影響によってすべてを説明することはできない。事実、オセアニアはオセアニアで、独自の文化的動態をもっていたのである。たとえば、オセアニアにおけるオーストロネシア語族の移動についての最初の考古学的証拠である Lapita 文化は、東南アジア島嶼部の諸文化とある種の関連をもっているものの、先史的資料の現状においては、この地域のなかには、いかなる母文化も、いかなる直接の前身も同定できないのである [BELLWOOD 1978; 1985]。むしろ、Lapita 文化は、東南アジア島嶼部の諸文化から影響を受けて、ニューギニアにおいて形成され、それから東に拡がったものと推測できよう。

東南アジア巨大群とオセアニア巨大群との間のきわめて顕著な2分は、われわれの研究の次の段階における発見的戦略を考案するのを可能にしてくれる。つまり、われわれのデータを東南アジアとオセアニアという2部門にわけ、これら各部門内部において文化の分類をおこなうことである。この方法は、関係の諸文化の新しいグループを可能にするばかりでなく、今回の樹状図において、残余区分中に放りこまれてしまった諸文化の、分類上のよりもっともな位置づけを可能にしてくれるかもしれないのである。

われわれのデータを2分してみれば、母系クラスターがでてくるかもしれない。今回の研究においては、父系クラスターと双系クラスターの存在を、文化要素のクラスターばかりでなく、文化の因子分析においても、また文化要素の因子分析においても確かめることができた。けれども研究の現状においては、これらと比較できるような母系クラスターは、まだ検出されていない。私の予想では、東南アジアの母系クラスターはオセアニアの母系クラスターとは若干別の要素を含んでいるのである。これら2地域を別々に分析してみると、おそらく東南アジアの母系クラスターやオセアニアの母系クラスターが明らかにできるのではないかと予想される。

2. 亜中核モデル

この初次的な2分のほかに、われわれの四つの接近法（あるいはすくなくともその

うちの三つ)は、若干のグルーピングの設定や、若干の文化形態の想定を可能にしてくれた。つまり、東南アジアの穀物栽培民、水稻栽培民文化、東南アジア高文化、アッサム部族文化、東南アジア島嶼部の双系社会、華南の亜中核諸文化、台湾の雑穀栽培民文化、オセアニアの根栽栽培民、ポリネシア・ミクロネシア文化、そして最後に、パプア栽培民である。

これらの文化類型の設定は、当諸地域の文化史にとってかなりの重要性をもっている。1例を挙げれば、台湾雑穀栽培民諸文化が、等質的なまとまりを示していることは、オーストロネシア語族のなかの台湾諸語が特別な地位を占めていることを傍証するものである。事実、周知のように何人かの言語学者 [DAHL 1973: 125; BLUST 1976, 1980] は、台湾語派をオーストロネシア語の基幹部から最初にわかれでた枝とみなしているのである。

文化史的に見て、もうひとつ重要な別の文化類型は、わたしが《亜中核的subnuclear》とよんだものである。わたしはこの範疇のなかに、華南や東南アジアにおける一連の《未開》でもなければ《文明》でもない諸族をいれた。この用語を作ったのは、アメリカの人類学者クローバー (Kroeber, A.L.) であった。かれはメソアメリカの北部と西部地域を、より発達した南部諸文化から区別するために、この用語を作ったのである [KROEBER 1948: 782]。この用語はレーマン (Lehman, F. K.) によって、ビルマの Chin 社会の研究において採用された。《亜中核》という用語で、かれは、「文明(《核》文化地域)と接しながらも、この核文化やその社会とは別物であるような、文化、社会の諸群」をさした [LEHMAN 1963: 225]。

わたしは《亜中核》の語を本来の意味に近い形で用いることにする。その場合、徴候的な諸要素の存否が、決定的な基準である。クローバーの規定を少し変えて、わたしはつぎのようにおう。亜中核地域は、常に、限られた程度においてであるが、高文化に特有の若干の要素をもっているが、高文化にとってもっとも特徴的な要素の若干や、その他の多くの要素を欠いているのである [KROEBER 1948: 787]。

《亜中核》は、かなり広い概念であって、東南アジア、華南の亜中核諸文化の全部を、もっと細かく分けることができる。ひとつだけ例を挙げれば、華南とインドネシア北部における、著しく中国化した亜中核群の存在が認められる。この群は文化の樹状図の華南区分 (I-B-i-a) と、文化の因子分析中の因子 4 の強群に相当している¹⁾。さらに、文化要素の樹状図もまた華南とインドネシア北部に特徴的に分布している諸要素

1) 華南型の亜中核文化の存在に気がついた先駆者の一人はコンドミナス (Condominas, Georges) であって [CONDOMINAS 1953: 638-657]、かれはインドシナ北部のこれら諸族を《移住してきた北部諸族》とよんだ。

の小クラスターを提示している。

このような民族と文化の集合が存在することは、すでに研究者が予期していたところであるが、明確な文化類型として規定した人類学者は少なかった。したがって、華南の亜中核モデルの設定を、われわれの研究の成果のひとつとみてよからう。

わたしは文化要素の存否によっておこなう文化分類が、はげしい、かつ多くの批判にさらされた方法であることをよく知っている。1例だけに限定すれば、レーマンが、文化要素の存否によって文化領域を設定することの妥当性を、つぎの二つの論拠に基づいて問題にしたことが想起される。第1に、「文化要素の表をつくり、これら文化要素のあいだには妥当性 *relevance* や記述的特殊性におけるはなはだ大きな相違があることを無視して、これら要素にすべておなじ点をつけるのがふつうである。」

第2に、「類似の程度はある文化がこの要素表中、何パーセントの要素を所有しているかを尋ねてきめられる。そしてこの問題を決定するための基礎となる、臨界パーセンティジは、恣意的に選択されるのだ」[LEHMAN 1964: 381]。

この方法のこれらの欠陥にもかかわらず、わたしは文化要素の存否による分類は、その他の方法では同様な成果が期待できないような長所もっていると確信している。

第1に、文化要素の統計的分析は、膨大な量のデータを取りあつかうことができ、またこれによらなければ見えないようなグルーピングや組み分けを可能にしてくれる。2例だけあげれば、文化の因子分析における各因子の強群と弱群の対照であり、また若干のインドシナ諸文化と、若干の東部小スンダ列島諸文化の間の文化的類似である。

この方法には、もう一つ別の長所もある。それはすでにしられている議論や、予想されているものを、数量的に証明することである。東南アジア巨大群とオセアニア巨大群という2分が、おそらく最も適切な例であろう。また、オセアニア栽培民の全体のなかで、メラネシア諸文化と、ミクロネシア=ポリネシア諸文化とにわかれることも、例としてあげられる。最後にこの方法は、東南アジア亜中核諸文化の内部に明瞭な一細分として、華南亜中核類型をしるしづるたことを可能にしてくれた。

いうまでもなく、諸民族や諸文化要素のこのような統計的分類は、けっして決定的なものではありえない。本研究は、他の民族サンプル、他の文化項目表、他の計算法によって追試されるべき、一試論にすぎないのである。